恩師の教え

札幌市医師会
上原内科クリニック
上原（うえはら）　聡（あきら）

医学部を卒業して40数年が経過し、無床診療所を開設して地域医療に携わるようになって18年が経った。今までの医師としての歩みを振り返り、次世代の優秀な臨床医たちへエールを送る意味を込めて、拙文をしたためたいと思う。

小生は1981年に旭川医科大学を卒業後、直ちに並木正義教授が主宰される第三内科に入局した。並木先生は1952年に北海道大学医学部を卒業され、1976年に旭川医科大学第三内科初代教授に就任された。その後、18年間にわたり教室を主宰され、消化器病学や心身医学など、多岐にわたる分野で活躍されたが、小生が入局したのは教室が創設期から発展期に移行する時期であった。そして、並木先生が1994年に退官されるまでの間、直接指導を受けるという幸運に恵まれた。

並木先生は1984年に第25回日本心身医学会総会・学術講演会の会長を務めているが、心身医学との関わりを次のように述べている。

> 医者になっていろいろ経験しているうちに、心身医学の必要性を強く感ずるようになりました。患者を心身両面から全体的なものとして見つめアプローチする、という心身医学的な考え方に根ざした医療こそ、臨床医学の基本的なあり方であり、そうでなければ病人を真に治すことはできない。また、臨床医学において、病む人の苦悩を除くことができなければ意味がないと思うようになりました。心身医学的な考え方とその実践は、すべての医者が素養として身につけるべきものであり、各科の医者がその専門分野の力を十分養うと同時に心身医学を踏まえた医療を実践することが最も望ましいことです。

そして教室員には「病気そのものを診るのではなく、病気を持った患者さん全体を診なさい」、「消化管の内視鏡をやる者は心の内視鏡もやりなさい」などの言葉を用いて、全人的医療の重要性を強調された。

並木先生は当時の内科教授としては特筆に値するほど外来診療を大切にされていた。教授外来には大勢の患者さんが押し寄せ、診療が夜遅くまで続くことも珍しいことではなかった。しかし、どんなに混雑している外来でも、一人ひとりの患者さんの訴えに熱心に耳を傾け、丁寧に診療する姿には感動を覚えるほどだった。教授外来の助手として身近に並木先生の診療を勉強することができたことは、小生にとって最高の財産となっている。

学会出張や教授会などで教授外来の代診を務めることもあったが、診察室に入ってきて並木先生が不在であることを知った患者さんの落胆した姿に何度も出くわした。さらに、教授と同じ処方を出したにも関わらず、次回の診察時に「前回、そこの若い先生が出してくれた薬はちっとも効きませんでした」と教授に訴える患者さんに出会った時には、思わず処方箋控えを再確認したものだった。「同じ処方を間違いなく出したのだから、効かないわけがない」と心の中で憤ってみたものの、よくよく考えてみると、小生が出した処方箋は教授と全く同じだったとしても、診察したのが教授ではなく、若輩の医師だったという厳然たる違いがあったのだ。すなわち、小生が出した処方箋には「並木カプセル」が入っていなかったわけで、そのために「効かなかった」のだと合点した。これはM. Balintが説いた「一つの薬としての医者（doctor as a medicine）」やJ. G. Watkinsが提唱した「治療的自我（therapeutic self）と相通ずる臨床医学の基本に他ならない。

医学の進歩は日進月歩であり、最近では医療分野におけるAIの応用も急速に進んでいる。難しい病態に適切な診断を下し、最善の治療方針を決定する能力も、近い将来には人智を超える可能性すら示唆されている。医者不要論もちらほら囁かれている昨今である。しかし、患者さんの訴えに熱心に耳を傾け、患者さんの身体所見を丁寧に診察するという臨床医の基本は、どんなにAIが進歩しても、永遠に変わることのない医療の原点だと信じる。

2011年から旭川医科大学の非常勤講師として、「地域医療学」の中で毎年２時間ほどの学生講義を担当している。並木先生の教えを次世代の医師の卵に伝えていくことが不肖の弟子の務めと考えて講義に臨んでいるが、小生が語る並木先生の教えを熱心に聴き、目を輝かせている医学生たちに頼もしさを感じている。

本稿の締めくくりとして、並木先生が最終講義で述べられた「望ましい医師像」について引用したい。

> 長年、医学教育に携わってきてしみじみ感じている私の望む理想の医師像とは、思いやりの心と謙虚さ、目に見えないものを感じ取る感性、そしてものの憐れを感じる情操、この３つを併せ持った医師だということです。この中で思いやりの心と謙虚さは心がければ若くとも培われるものであり、医学生のときから努めて欲しいと思います。

※本稿は『心身医学　第61巻３号』に掲載したものを一部修正いたしました。